

前批判期カントの空間論の問題

——一七六八年から一七七〇年にかけて——

草 野 章

一

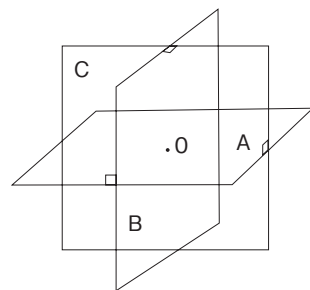
一七六八年カントは『空間における方位の相異に関する第一根拠について』(Von dem ersten Grund des Unterschiedes der Gegenden im Raume 以下『空間の方位』)なる小論文を発表した。この論文の目的を彼は次のように語っている。

「この論文における私の目的は、幾何学が含むような、延長に関する直観的判断において、絶対的空間 (der absolute Raum) があらゆる物質の現存から独立に、それ自身物質の連関の可能性の第一根拠として、固有の実在性を有するという明証的な証明が見出されないかどうかを探ってみることである。」⁽¹⁾

この絶対的空間の理論は、前批判期のカントの他の著作においては全くと言っていいほど見られない(批判期以降では、一七八六年の『自然科学の形而上学的原理』になると再び姿を現す)ものであり、また一七七〇年の『可感界と可想界の形式と原理について』

(De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis 以下『就任論文』)では、空間を純粹直観として把握する理論が登場するから、わずかの年月の間だけカントはこの理論を抱いていたわけであるが、絶対的空間という、この小論文における空間理論がニュートンの影響⁽²⁾によるものであるのか、或いはカントが論文中でその名を挙げているオイラーの影響によるものであるのか、それともヴォルフに対する反駁⁽³⁾のためのものであるのかというような哲学的連関を決定するのは容易ではないと思われるので、ここではそのような研究はさて置き、カントの言う絶対的空間が如何なるものであったかを探ってみることにしたい。

カントは、空間は三次元であるという前提(これは処女作『活力測定考』から『純粹理性批判』まで一貫して保持されている)から、相互に全て直角に交叉しあう三つの平面を導き出す。図解すると次のようになる。



便宜上これら三つの平面をそれぞれ A、B、C と名付けるとし、我々の身体の中心を（頭を上にして向こう向きで）三平面の交差点 O に置くとすると（カントは、我々の身体に対するこれらの交叉面 Durchschnittsfläche の関係が方位の概念を生み出す第一根拠であると考えている）、我々の身の丈（Länge）が垂直に立つところの平面（A）は我々に関して水平（horizontal）と呼ばれ、上と下（Oben und Unten）とによって我々が言い表す方位を区別するきっかけを与えることになり、また B は身体の右と左、C は身体の前と後を区別する根拠となる、とカントは言う。カントはこのように方位の根拠を示してから、この方位が、場所の位置についての我々の知識に、そして大きさや相互の位置に関して完全に一致する二つの生き物（例えば他の点では完全に一致する右巻きと左巻きの蝸牛）を区別するのに必要であると述べる。

これらの方位の区別の証明は「絶対的空間の現実性を主張することのできる決定的な第一根拠」⁽⁴⁾を与えるための準備であるが、カントはこれを「立体の形態の完全な規定根拠」⁽⁵⁾ (der vollständige Bestimmungsgrund einer körperlichen Gestalt) に応用する。⁽⁶⁾ の根拠は立体の諸部分相互の関係と位置に基づくのではなく「一般的絶対的空間」に基づくとかントは主張し、その証明を「不一致対称物」⁽⁶⁾ (inkongruentes Gegenstück) についての論議に求めている。

る。これは、例えば人間の右手と左手のように一方が他方に完全に等しく類似しているが同一の限界内に包まれないものをいう。即ち、一方が他方と区別されるのは「一方を包む表面が他方を覆い得ない」⁽⁷⁾ 点においてのみであるようなものである。この区別が絶対的空間を証明するものであり、また空間を物質の諸部分の外的関係に存するものであるとする（カントはこのような考えを反駁しようとしているのだが）と右手と左手が人体のどちらの側にも適合することになる（相互に等しく、従って如何なる区別も存しなくなるから）が、このことは不可能であるとカントは論ずる。

周知の如く、カントの空間論におけるこの右手と左手による例証は、主要なものを取り上げるならば、その後二度出現した。初めは『就任論文』§15⁽⁸⁾において空間を「純粹直観」(intuitus purus)として示すために、次は『プロレゴメナ』§13⁽⁹⁾において空間を感性的直観の形式——現象のみに関わり、物自体には関わらない——として示すために。『就任論文』と『プロレゴメナ』における例証はそれほど相異はないが、しかしこれらの例証を『空間の方位』における例証と比較するとその相異は歴然としている。前二者の例証は空間がとにかく感性的なものであつて悟性的なものでないことを示そうとしているが、後者の例証は「絶対的空間の現実性」を示すことを目的としている。右手と左手は合同であるがしかし重ね合わせることはできない、というこのパラドクスをカントは全く別々の空間理論を証明するために用いているのである。このパラドクスによるカントの空間理論の証明は有効であるうか。合同ではあるが

重ね合わせることでできないものの差異が絶対的空間に基づくにせよ、純粹直観に基づくにせよ、どちらにしても説明がつくなら、空間に関して二つの異なった結論を導くことになり、この例証による空間の説明は何らの効力も有しないことになる。カントはその時々自分の空間理論にこのパラドクスを適合させており、聊か恣意的であるという印象を拭えない。ユーイングが指摘するように、この例証が使用された各々の場合に別々の前提が存在したのではないか。『空間の方位』における空間論は「空間は物質の並列して存在する諸部分の外的関係にのみ存する、という多くの新しい、特にドイツの哲学者たちの考え」¹¹⁾に向けられていた。ここで言われている「ドイツの哲学者たち」とはライプニッツ・ヴォルフ学派を指しているのだろうか、もし、空間を「外的関係」とするならば、カントが言うように、右手と左手について、一方の完全な記述は他方の手についても当て嵌まり、故に両者は合同となるであろう。しかしそれにも拘らず、両者を重ね合わせることはできないから、両者は一致しない。¹²⁾ このパラドクスの解決を一七六八年のカントは絶対的空間に求めた、それは空間を物質の外的関係とする説に反駁するためのものであった。そして一七七〇年と一七八三年のカントはこの解決を直観に求めた、それは感性と悟性の区別、或いは純粹幾何学の妥当性のためのものであった。¹³⁾ ここにそれぞれの隠された前提があったのである。

有体によえば、異なった前提から同一の例証が全く相反するような結論を導くという点において、カントの証明は我々にその有効性

を疑わしめるものである。もし周知の「六九年の大きな光」が通説のように『純粹理性批判』における宇宙論的アンチノミーの解決と共に、人間の直観能力の感性的形式としての空間と時間の理論の発見を指すものである (Klaus Reich はこれに反対する)¹⁴⁾ ならば、カントは一七六八年に抱いていた絶対的空間の理論を捨て去らねばならなかった。そして絶対的空間の論拠となっていた、合同ではあるが重ね合わせることでできない右手と左手のような不一致対称物に関するパラドクスの解決を、一七七〇年に、自分の発見した空間を直観とする理論に適合させざるを得なかったのではなからうか。一七七〇年のカントは『就任論文』§15Dにおいて、空間を實在的なものとする説を、また事物の關係とする説を両方とも否定した (尤もカントは後者の説により、激しい敵意を見せている)。

「空間は客観的なもの、實在的なものではないし、実体でも属性でも關係でもない。そうではなくて主観的なもの、観念的なものである」¹⁵⁾

これを以って彼は第三の新しい空間理論を切り開いたのである。それは空間を純粹直観として把握することであった。Conceptus spatii itaque est intuitus purus. Der Raum ist . . . eine reine Anschauung. カントは何故絶対的空間の考えに甘んずることができなかったのであろうか。彼は空間を絶対的なものとする見解について次のように述べている、

「ノウメナに關係し、更に悟性にとって特に曖昧であるような幾つかの理性概念に對して、例えば靈魂の世界や遍在 (omnipraesentia)

に關する間に対して障礙を置く⁽¹⁸⁾」と。この「障礙」(Offendiculum)とは何か。

二

一七六六年、スヴェーデンボリの神秘哲学に強く影響されたカントは『視靈者の夢』(Träume eines Geistesehers)を著した。この著作は、メンデルスゾーンが言うように、「しばしば読者をして、カント氏が形而上学を物笑いの種にしようとしているのか、或いは視靈を信ずべきものとしようとしているのか疑わしめる⁽¹⁹⁾」ものであつて、カントの真意を捕えるのはなかなか困難なのであるが、カントが一七六六年四月八日付メンデルスゾーン宛書簡の中で、「私の考えでは、如何にして靈魂が世界において物質的本性のもの、並びに靈魂の本性を持った他のものに現前しているかという問題についての資料を探し求めることに全てがかかっているのです⁽²⁰⁾」と述べていることから、また「それゆえ諸君が物質によって充たされた空間においてでさえ現前しうる存在者を考える場合にのみ、諸君は靈魂の概念を保持しうるのである⁽²¹⁾」、「靈的な本性のものは、空間がそれにも拘らず物質的存在者に対して依然として透入的(durchdringlich)であり続けるような具合に、空間において現前するであろう。何となれば、靈的な本性のものの現前は、空間の充満即ち固性(Solidität)の根拠としての抵抗ではなく、空間における活動を含むだろうからである⁽²²⁾」という言葉を思い合わせるなら

ば、靈魂と空間の関わり合いが『視靈者の夢』の主要問題のひとつであつたことはすぐに気付かれるであろう。カントは靈魂の存在に關してしばしば疑念を漏らしはするが、「世界における非物質的本性のものの現存を主張することに、そして私の靈魂自体をこれらの存在者の部類に入れることに大いに傾いていると告白する⁽²³⁾」と語つた。それ故、カントは非物質的本性のものの現存を認めた上で、これと空間との關係を問題にする。物質的本性のものが空間を充たし、延長を有し、不可入的であるのに対し、非物質的本性のもの(靈的本性のもの)は「空間を充たすことなしに(即ち空間の中で物質的実体に抵抗することなしに)空間を占有する(即ち空間の中で直接的に活動的でありうる⁽²⁴⁾)」。しかしこの「事柄そのものは理解されないままである⁽²⁵⁾」。カントはこの問題を如何にして解決したか。その成果は一七七〇年の『就任論文』に見出される。

「第一類の窃取的公理は、存在するものは全て何処かに、そして或る時にあるというものである。しかし、この真正でない原理によつて、あらゆる事物が、仮令可想的に理解されるにしても、存在することにおいて空間と時間の条件に服せしめられる。それ故、物質的世界における非物質的実体(その本性からして、これらのものについての可感的直観及びそのような形式の下での表象はあり得ない)の場所や靈魂の座等に関する多くの空虚な問が生ずる……。しかし、物体的世界における非物質的なものの現前は動的であつて、場所的ではない(Est autem immaterialium in mundo corporeo praesentia virtualis, non localis.)⁽²⁶⁾」

「非物質的なものは外的感覚的に知覚可能なものの普遍的条件から、即ち空間から全く除外されるのである」⁽²⁷⁾

カントは、第一類の窃取的公理から判るように、空間の制約を受けないで存在するもの（非物質的なもの）を認める。そうすると、カントの言う「障碍」とは、絶対的空間を認めるならば非物質的なものに空間の制約が与えられてしまうということなのではないか。絶対的空間という見解に従えば、「存在するあらゆるものは：必然的にどこかにある」⁽²⁸⁾ことになる。カントは指摘している。一七七〇年に提出されたカントの新しい空間理論は、空間が純粹直観であり、「主観的であり、観念的なものである」というものであった。もし空間がそのようなものであるならば、非物質的なものが絶対的に空間の何処かの場所に存在するとは決して言い得ない。空間は我々の知覚の条件のひとつに過ぎないからである。空間は絶対的なものではなく、純粹直観という主観的なものであるというカントの考えは、空間の制約から非物質的なものの存在を救おうとするひとつの要請であったと解せられることはできぬであろうか。このことは、カントが「神」を問題とする時に一層明らかになるであろう。

三

『視靈者の夢』においては、「世界全体の創造者であり、またその維持者である無限の靈魂」⁽²⁹⁾の存在は謂わば自明とされている。この著作

で初めて非物質的なものの存在と空間との関わり合いが正面から取り上げられた。しかしそれは問題提起に留まっている。『就任論文』では、空間を主観的感性的なものとすることによって、非物質的なものに空間的な規定を与えることが避けられる。神に関しては、「神の現前を場所的なものと建構し、神が恰も無限の空間によって同時に包含されるかのように、神を世界の中へと含める」⁽³⁰⁾ことが否定されている。更に『純粹理性批判』では、空間と時間は神の存在の諸規定を示しえないことが帰結し、神の存在から空間と時間の制約を取り除くことが企てられる。カントは次のように言っている。

「自然神学においては、我々にとつて全く直観の対象となりえないのみならず、それ自身全く感性的直観の対象となりえない対象が思惟されるので、その対象のあらゆる直観から・・・時間と空間という条件を取り去ることが周到に考慮される。しかし、前もってこの二つの条件を物自体の形式、しかも仮令物そのものが無くされてしまつても、事物の存在のア・プリオリな条件として残存するような形式と為すならば、如何なる権利を以つてこのことは為されうるのであろうか。何故なら時間と空間はあらゆる現存一般の条件として神の現存の条件でもなければならぬからである。もし時間と空間をあらゆる事物の客観的条件としようとするのであれば、これらを我々の外的及び内的直観の仕方の形式的条件とする以外にない」⁽³¹⁾

この「外的及び内的直観の仕方の形式的条件とする以外にない」ということをカントは何処から知ったのであろうか。

もし絶対的空間を認めるならば、神はその制約を受けて世界の何処かに存在しなければならなくなってしまう（神の現前が場所的なものとなってしまう）。恐らくカントは絶対的空間理論からの斯かる帰結を回避せざるを得なかったのである。G・マルチンが指摘するように、絶対的空間という考え方においては、空間が神の存在に関係することが避けられないからである。⁽³²⁾

一七六六年以来の非物質的本性のものと空間との関わり合いの問題はこうして解決された。それは、空間が主観的なものであるが故に非物質的本性のものの現前や存在の条件とはなりえないというものである。空間が我々にのみ関わる主観的なものであるならば、非物質的本性のものは最早空間に制約されることはないし、空間における非物質的本性のものの現前の仕方は問われる必要がないものとなる。非物質的本性のものの存在はこうにして空間問題から救われたのである。⁽³³⁾

カントが空間を純粹直観として把握したことは、発見というよりはひとつの要請であった。その根柢には、以上に見てきた不一致対称物と非物質的本性のもの（特に神）に関する困難な空間的問題を解決せんとするカントの努力が横たわっていたのである。カントは幾何学の妥当性の故に純粹直観の説を唱えたのだと言う人は、既に彼が『空間の方位』において幾何学（*Mathematik*）⁽³⁴⁾に關して絶対的空間の実在性を証明しようとしていること、また『純粹理性批判』においては、空間の絶対的実在性の立場を取る人には数学的主張に現象の領域を解放するという有利な点があると言われていることを⁽³⁵⁾

思い起こす必要がある。幾何学の問題は、カントに純粹直観としての空間論を取らせた間接的な動因でもあったかも知れないが、直接的な動因ではなかったであろう。彼が絶対的空間の理論を斥けざるを得なかったのは「悟性が現象の領域を越えようとする場合」⁽³⁶⁾に空間（と共に時間の）の実体性の主張者が「困惑に陥ること」⁽³⁷⁾——『就任論文』の言葉を以てするなら、神や靈魂と世界に関する問に対する「障碍」——の故であった。

空間を物質の諸部分相互の外的関係とする理論（『就任論文』では斯かる、空間を事物の外的関係とする考えは幾何学に明らかに矛盾すると言われる）を、カントは不一致対称物のパラドクスを突きつけることによって反駁し、このパラドクスの解決をあらゆる物質の現存から独立した、それ自身の実在性を持った絶対的空間に基づけたと信じた。ところが彼はもうひとつの全く異質な問題を抱えていた。即ち、非物質的本性の靈的存在者と空間の関わり合いの問題である。一七六三年八月十日付シャルロッテ・フォン・クノープロッホ嬢宛書簡から知られるように、スヴェーデンボリに関する事件の信憑性に圧倒されて、カントは靈魂の問題に強い関心を抱くようになる。一七六四年の『自然神学及び道德の判明性の探究』（*Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral*）⁽³⁸⁾においては次のように言われている。⁽³⁹⁾

「私は、我々が所有している証明が、魂は物質ではないということを示すのに宜しいものであることを認める。しかしそこから、魂

が物質的本性のものでないと推論することを避けるがよい。何故なら、この証明の下では誰もが魂は物質ではないということのみならず物質の一要素たり得るような単純な実体でもないことを理解しているからである。斯かることは特別な証明、即ちこの思惟する存在者が物理的要素のように不可入性によって空間中にあるのでもないし、また他のものと合して延長物や塊を形成することもできない⁽⁴⁰⁾という証明を要求する。斯かることについては実際まだ何の証明も与えられていないのであって、もしその証明が発見されるならば、靈魂が空間に現前する不可解な仕方を示すであろう。⁽⁴¹⁾

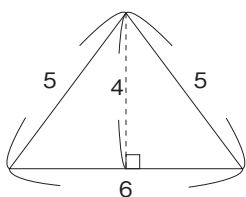
この靈魂と空間の関わり合いが一七六八年の『視靈者の夢』において重要な問題として取り上げられたことは既に述べた。

もし一七六八年当時の絶対的空間の説を採用するならば不一致対称物の問題は解決することになるが(カントに従えば)、非物質的存在者の空間における現前の問題は解決しない。非物質的存在者の空間におけるあり方が不可解となるし、また特に神がその制約を受けて世界の何処かの場所に存在しなければなくなってしまうからである。それ故、カントは両方の問題の困難を同時にうまく解決するために(恐らく後者により、多くの比重が掛けられていたであろう)空間の主観性を要請したのではないか。それによって絶対的空間から神の存在を救い、また神の存在の故に絶対的空間を斥けざるを得ないから、絶対的空間の論拠となっていた不一致対称物のパラドクスを純粹直観の理論に適合させざるを得なくなったのである。これは窮余の一策であった。

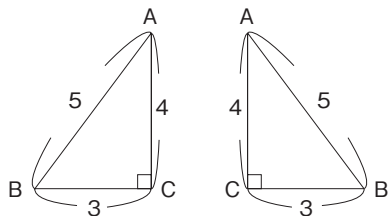
【註】

使用したカントのテキストはアカデミー版カント全集に拠り、巻数と頁数をそれぞれローマ数字とアラビア数字に示すが、『純粹理性批判』に関してはFelix Meiner社の哲学文庫版(Philosophische Bibliothek Band 37a)を用いて書名をKvと略記し、通例に従って第一版A、第二版Bの頁付で引用箇所を示す。

- (1) II 378.
- (2) 多くの学者はこのように解する。Vgl. Gottfried Martin, Immanuel Kant, Berlin 1969, S.32. Norman Kemp Smith, A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason, 3rd ed., New Jersey 1984, p.163.
- (3) Klaus Reich, Einleitung des Herausgebers, Ph.B., Bd.286 (Täume eines Geistesichers), Hamburg 1975, S.IX-XVIII.
ライヒはニュートンとの関連をほごきりと否定する(s. ibid. S. XI)。
- (4) II 378.
- (5) II 381.
- (6) II 382.
- (7) 2a.0.
- (8) II 402.3.
- (9) IV 285.6.
- (10) A. C. Ewing, A Short Commentary on Kant's Critique of Pure Reason, 6th impression, 1974 Chicago, p.54.
- (11) II 383.
- (12) 例えは左図の三角形を考えてみよう。



頂角から底辺に垂線を引いてこれを二等分してみると、二つの直角三角形



が得られるが、これらの一方についての記述（辺の長さや角の大きさ等）は他方についても悉く当てはまり、両者は合同となるが、しかし同一平面上で重ね合わせることは出来ない。

Cf. T.E. Wilkerson, Kant's Critique of Pure Reason, 1976 Oxford, p.38.

両手の場合についても、完全合同ではなく上に少し複雑になるけれども、同じ事が言える。

- (13) IV 287.
- (14) Klaus Reich, Einleitung des Herausgebers, PhB, Bd.251 (De mundi sensibilibs atque intelligibilibs forma et principiis), S.XIff.
- (15) II 402.
- (16) aa.O.
- (17) KrV., A24f./B39.
- (18) II 404.
- (19) Vgl. Mendelssohns Besprechung der Schrift in der Allgem. dtsh. Bibliothek IV, 2St., 1767, S.281.
- (20) Brief an Moses Mendelssohn 8. April 1766, X 69ff.
- (21) II 321.
- (22) II 323.
- (23) II 327.
- (24) II 323.
- (25) aa.O.
- (26) II 413-4.

- (27) II 419.
- (28) II 406.
- (29) II 321.
- (30) II 414.
- (31) KrV., B71f.
- (32) G. Martin, op. cit., S.189.
- (33) 即ち「空虚な間（Vgl. II 413）」となる。
- (34) Vgl. II 378.
- (35) Vgl. KrV., A40/B57.
- (36) aa.O.
- (37) aa.O.

この「困惑に陥ること」というのはアンチノミーの問題ではない。それは、「理性」ではなく「悟性」という言葉が使われていることから容易に知られる。悟性が現象を越えようとする際の問題は、悟性が感性の制限を越えてノウメナに関わろうとする場合に生ずるものである（この問題は「純粹理性批判」の「判断力の超越論的理説第三章」以下で扱われる [Vgl. KrV., A235/B294ff.]）。

ノウメナは「専ら悟性によって対象として思惟されるが、我々の感官の客体などではない可能な事物」(KrV., B306f.) であるが、それによってカントは「非物質的存在者、悟性界 (Verstandeswelt)」、万物の最高存在者（純粹なノウメナ lauter Noumena）等を考えているのである (Vgl. IV 354)。アディクセスのよびに解つた。

Vgl. Erich Adickes, Kant und das Ding an sich, Berlin 1924, S.110.

- (38) Brief an Fräulein Charlotte von Knobloch, X 43ff.

然しながら、一七七一年頃までにカントのスヴェーデンボリに対する関心は冷めつゝあつたものとされる (Vgl. Karl Vorländer, Immanuel Kants Leben, PhB, Bd. 126, S.13)。¹⁾ これはカントが『就任論文』において靈魂と空間の關係に纏わる問題を解決してしまったからであらう。

- (40) 『視靈者の夢』では靈魂について「不可入性という性質を持ち合わせておらず、如何に多く結びつけられても決してひとつの固い全体を形成することはない」と言われている。Vgl. II 321.
- (41) II 293.

（くろの あきら 本学准教授・哲学）